

排他から受容へ

今 泉 信 宏

皆さんは「単一民族」という言葉を聞いたことがあるでしょう。これは日本社会構造を象徴する言葉のみならず、日本人の生き方そのものでもあるのです。英語の言葉にxenophobia（ゼイノフォビアと読みます）というのがあります。これは外国人を嫌う、排除する（アメリカの歴史の大きな部分でもある）という意味です。日本は日本人のためだけのもの。このような考えを持った人がまだまだ多くいるのです。日本は決して「単一民族」社会ではありません。アメリカの原住民である、ネイティブアメリカンもそうですが、日本にもアイヌ民族が長年住みついていた。それを野蛮ということで排除し排斥してきたのです。今日、日本には200万以上の外国人が居住しています。そして日本人のやりたがらない、低所得で危険な仕事に従事しています。子どもたちは学校へ行くと文化、習慣、作法、またお弁当などが違うということではじめられています。こういうことを皆さんはご存知でしょうか？

日本の社会は周知のごとく少子、高齢化が同時進行しています。2054年までに何と日本の人口は1億を切るとまで言われています。ということは、日本人だけでは労働は回らなくなります。外国人の労働力なしには、日本社会は動かなくなるのです。その時点で外国人にいらっしゃいと言っても、はたして来てくれるであろうか？ 今学校でいじめられている子どもたちが成人しているところです。日本での苦い経験を思い浮かべて、日本にはもう2度と行きたくないと思えるかもしれません。つまり現在日本にいる外国人をわれわれ同様に扱っていくことが大切なことなのです。日本人でも就職が困難な時、外国人のことなんか考える余裕なんかないという考えが主流かもしれない。しかし数十年先のことを鑑みれば、現在の日本居住の外国人を日本人同様にしていかなければ、日本の未来事態が危ういことを理解すべきであろう。

「多様性」という概念や生き方は日本では定着していない。現代のアメリカでの流行語はdiversity=double belongingです。一方だけではなく、両方につながっていることがdiversity（多様性）を身につけることである。わたし自身アメリカと日本が自分の中で息づいています。それが私を私らしくしているのです。一人一人がこのdouble-belongingを身につけるのにどうすればいいのかを考えつつ生きていくことが求められている今日ではないでしょうか。

（総合政策学部宗教主事）